

第157回鶴見大学図書館源氏物語研究所貴重書展

源氏物語



の古注釈

2023 入場無料
2/20(月) - 3/18(土)

[2/20~3/4] 月~金 8:50-21:00 土 8:50-18:00
[3/6~3/18] 月~金 8:50-18:00 土 8:50-12:30
[3/14] 卒業式特別展示 10:00-16:00

● 日曜・祝日閉館
● 鶴見大学図書館1階エントランスホール
交通：JR 鶴見駅より徒歩 10分
京急鶴見駅より徒歩 15分

*学外の方も展示をご覧になれます。入館時はカウンターにお声がけください。入口のゲート横に呼び出しボタンがあります。
*開館時間に変更となる場合がありますので、ご来館の際は図書館ホームページをご確認ください。

◆主な展示品

- 『源氏釈』(断簡) 藤原伊行著 1幅 [鎌倉後期] 写 *伝頭昭筆 *建仁寺刻
- 『源氏釈』(断簡) 藤原伊行著 1葉 [鎌倉時代] 写 *伝賀茂甲斐敦直筆
- 『奥入』 藤原定家著 [江戸前期] 写 / 『紫明抄』(巻2残簡) 素寂著 [鎌倉末期] 写
- 『原中最秘抄』(抄出本) 源親行著・行阿ら増訂 [江戸前期] 写
- 『河海抄』 四辻善成著 [江戸初期] 写
- 『河海抄』 花鳥餘情 四辻善成・一条兼良著、宗祇抄出 [室町後期] 写
- 『源氏物語提要』 今川範政著 [江戸後期] 写 / 『岷江入楚』 中院通勝著 [江戸後期] 写
- 『湖月抄』 北村季吟著 [延宝元年(一六七三)刊] *献上本
- 『源註拾遺』 契沖著 [江戸後期] 写
- 『源氏物語玉の小櫛』 本居宣長著 [寛政11年(一七九九)刊]
- 『紫文消息』 橋本稻彦著 [文化4年(一八〇七)刊]



ご挨拶

初春の貴重書展は源氏物語研究所が担当しております。本年は文学部創設 60 周年にあたります。今回はそれを記念し、「賀」をテーマとして、源氏物語とその古注釈書を中心に展示することにいたしました。

鶴見大学文学部は、昭和 38 年（1963）に久松潜一博士を初代学部長として発足いたしました。翌年には、久松潜一文学部長が会長を務められていた紫式部学会の事務局が鶴見大学文学部日本文学研究室に置かれることとなり、日本文学科教員であった池田利夫博士（本学名誉教授）を中心に学術的価値の高い貴重書を体系的に収集しはじめ、現在の源氏物語研究所の礎が築かれました。

源氏物語研究所は源氏物語とその享受資料や関連文献を収集し、書物に即した基礎的調査を行い、また広く学内外に公開することを大きな仕事の柱としております。古典籍の収集に努力いたしますのは、書物こそが確実に学問を支え、研究を進めるための基盤となるからです。

さて、創設 60 年の文学部は言わば還暦を迎えたわけですが、平安時代は 40 歳から 10 年ごとに長寿のお祝いをしました。それを「算賀^{さんか}」などと呼びます。源氏物語のなかにもいくつか算賀の場面が見え、とくに若菜上巻における光源氏の四十の賀は詳しく描かれています。

本展示では、平安後期から江戸時代に至るまでの源氏物語注釈の歴史をたどりつつ、光源氏の賀宴の様子を垣間見ます。また、久松潜一初代文学部長の研究の始発点である契沖関係の資料をも併せてご覧頂きながら、本学学生および教職員、また日頃より本学を支えて下さる地域のみなさまと共に、節目の年の新春を慶びたいと存じます。

2023 年 2 月

源氏物語研究所・鶴見大学図書館

目次

I 初期の注釈 2	08 『源氏物語提要』〔江戸後期〕写
01 『源氏釈』（断簡）〔鎌倉後期〕写 * 建仁寺切	09 『岷江入楚』〔江戸後期〕写
02 『源氏釈』（断簡）〔鎌倉時代〕写	IV 江戸時代の注釈 7
03 『奥入』〔江戸前期〕写	10 『湖月抄』〔延宝元年（1673）刊〕 * 献上本
II 河内方の注釈 3	11 『源註拾遺』〔江戸後期〕写
04 『紫明抄』（若紫冒頭存）〔鎌倉末期〕写	12 『源氏物語玉の小櫛』〔寛政 11 年（1799）〕刊
05 『原中最秘抄』（抄出本）〔江戸前期〕写	13 『紫文消息』〔文化 4 年（1807）〕刊
参考 1 『源氏物語』（断簡） * 河内本	参考 4 「契沖の書簡に就いて」昭和 5 年（1930） * 久松潜一自筆原稿
III 室町時代の注釈 5	参考 5 『萬葉代匠記』（巻 2 存） 〔元禄元年（1688）頃〕写 * 契沖自筆
06 『河海抄』（巻 1 欠）〔江戸初期〕写	参考 6 『古今和歌集』 〔天和・貞享（1681-88）頃〕写 * 契沖筆
07 『河海抄』（上冊欠）・『花鳥餘情』 〔室町後期〕写 * 宗祇による抄出	凡例・展示担当 11
参考 3 『源氏五十四帖』若菜上 明治 26 年（1893）刊	

I 初期の注釈

01 『源氏釈』（断簡） 藤原伊行著 1幅 〔鎌倉後期〕写 *伝顕昭筆 *建仁寺切

登録番号、1071815。宿木巻の8行分。本来は左端にもう2~3行あったか。縦15.7cm×横12.3cm。本文料紙、斐紙。字高、約14.5cm。

清水了因による極札あり。縦14.5cm×横2.3cm。オモテ「太秦顕昭法橋〈不是偏花中愛菊／又天人ゆめのうちに〉(印)」、ウラ「六半切〈丁酉〉二(印)」。印記、オモテ「顕」(黒・陽・方・単。縦1.3cm×横1.3cm)、ウラ「精」(黒・陽・楕円・単。縦1.2cm×横0.9cm)、割印は朱・陽・方・双、縦2.5cm×横0.7cm。

『源氏釈』は『源氏物語』の現存最古の注釈で、書家としても著名な藤原伊行(?~1175)著。『源氏物語』に引用された漢詩や和歌などの指摘が中心。伝本は少なく、一次本に分類される冷泉家時雨亭文庫本と、二次本に分類される前田家本などわずかしか伝存しない。当該断簡は二次本に属しているが、前田家本よりも良質の本文をもつ。国宝手鑑『見ぬ世の友』などにツレがある。

当該断簡は匂宮が妻の中君の前で琵琶を弾く場面に対する注。庭の菊を手にした匂宮は中君と薫の関係を疑いつつ、「花の中に偏へに」と誦じたまひて、「なにがしの皇子のこの花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人のかけりて琵琶の手教へけるは」と語る。『源氏釈』はこの「花の中に偏へに」が「是れ偏へに花の中に菊を愛するにあらず、此の花開きて後更に花無ければなり」という元稹(779~831)の詩の引用であると説明する。この句は『和漢朗詠集』(菊・267)などにも採られて著名であったが、『元氏長慶集』では「開後」でなく「開尽」となっている。『江談抄』や『十訓抄』などによると、「開後」と歌われたのを元稹の霊が聞き、人に憑いて正しくは「開尽」だと言った。『源氏釈』では小児に霊がとりつき、作者の本意を歌い、なおかつ琵琶の秘曲を授けたと説かれる。また、天人が夢の中で琵琶を教える話は『夜の寝覚』にもあるが、これは『源氏物語』より後の作品なので、典拠にはならないと指摘する。

【翻刻】

不是偏花中愛菊此花開後更無花 / 又或物語云 / 西宮殿庭前靈物雖居構与詫前遊 / 少兒詠此詩教作者之本意兼請比 / 巴授秘手曲小兒醒了 / 又天人ゆめのうちにひはをしふる / ^(ツレ)る 事ねさめといふ物かたりにありされと / これは源氏よりさきの事はみえす

02 『源氏釈』（断簡） 藤原伊行著 1葉 〔鎌倉時代〕写 *伝賀茂甲斐敦直筆

登録番号、1382492。初音巻の末尾1行と「こてふ」の巻名。縦25.1cm×横3.0cm。本文料紙、楮紙。字高、約22.0cm。

藤本箕山(1626~1704)による極札あり。縦4.6cm×横2.3cm。「加茂甲斐敦直〈奈天也和礼〉(印)」。印記「金山」(黒・陽・方・単。縦1.4cm×横1.3cm)。ただし、藤木敦直(1582~1649)よりはるかに古い筆跡と見られ、わずか2行であっても、伝本希少の『源氏釈』にとって貴重な資料。

催馬楽「竹河」の詞章を示した注。初音巻の末で、光源氏が六条院に男踏歌を迎え、「竹河」が歌われた場面に対するもの。「竹河」は「竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ 花園に 我をば放てや 我をば放てや めざしたぐへて」という詞章で、当該断簡はその末2句にあたるが、最後の「たぐへて」が「たぐ」で終わっている。

【翻刻】奈天也和礼乎波波名天也女左之多久 / こてふ

03 『奥入』 藤原定家著 袋綴 (『源氏物語』54冊、『源氏目案』2冊、『源氏引歌系図』1冊) 〔江戸前期〕写

登録番号、0344022~78。縹色雷文繫地牡丹唐草文様型押表紙。縦25.8cm×横18.4cm。外題、表紙中央の金銀泥下絵打曇題簽(縦13.1cm×横3.0cm)に各巻名を墨書〔本文同筆〕。内題なし。本文料紙、楮紙。見返し、本文共紙。遊紙なし。毎半葉10行。和歌は改行して2字下げで書きはじめ、末尾は地の文へつなげる。字高、約20.2cm。本文は濡標巻までは1ウから、濡標巻からは1オから書写。奥書なし。蔵書印、各冊とも1オ右下に「白鬚」(黒・陽・方・無杓。縦1.7cm×横0.6cm)、その下に続けて「福壽院」(黒・陽・方・無杓。縦2.3cm×横0.7cm)。全体にわたって墨や朱の句点や濁点、言葉の意味の簡単な注

記などあり。胡蝶、篝火、行幸、藤袴、真木柱、若菜上、若菜下、柏木、蜻蛉、夢浮橋の巻末に『奥入』が記されるが、断片的なものもある。

『奥入』は歌人として名高い藤原定家（1162～1241）による注釈で、『源氏積』（01・02 参照）を増補・修正したもの。定家は『源氏物語』の本文を整定し、いわゆる「青表紙本」として現在の通行本文になっている。元来『奥入』は各巻の巻末（＝奥）に記されていたが、後に定家自らが『奥入』部分のみを切り取り、別冊形態にした。当該資料は『奥入』が巻末に記される点で古い形式といえるが、別冊形態のものから巻末に書き入れられることもあり、形態上の特徴は必ずしも注釈内容の先後関係と連動しない。また、本文も巻末付載と別冊形態に二分できるわけではなく、もっと複雑な成立過程が想定されている。なお、本学図書館には巻末に『奥入』をもつ伝徳大寺公維筆『源氏物語』（登録番号、1073357～408）なども所蔵されており、同本は池田利夫「中山本柏木と日本古典文学会本付載奥入」（『源氏物語の文献学的研究序説』笠間書院、1988年。初出1983年）に紹介される。

掲出したのは若菜上巻の『奥入』。冒頭の「老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほし（き君かな）」は『源氏積』にも指摘される歌で、朱雀院が自らの出家後の姫宮たちの境遇を心配する場面への注。朱雀院は『古今集』（雑上・900）や『伊勢物語』84段などに見える「老いぬれば」の歌の「さらぬ別れ」という表現を用いて、死別の際にも心残りになると暗示する（参考1参照）。

【翻刻】「○」はすべて朱。

○おいぬればさらぬ別れもありといへばいよ／＼見まくほし / ○春のよのやみはあやなし / ○子城陰處猶残雪 衡 鼓声前未有塵 / ○おりつれば袖こそほへ ○なき名そと人にはい / ひて ○むら鳥の立にしわか名 ○古のしつのをたま / き 席田第二反度也 / ○千とせをかねてあそふつるのけ衣ふく風も心しあらは / 此春はさくらをよきてちらさゝらん / ○見すもあらずすみもせぬ人の恋しくはあや（以下ナシ）

参考1 『源氏物語』（若菜・柏木巻存） 綴葉装1帖 〔室町末期〕写

登録番号、1389653。若菜上下・柏木巻を合写。金色無地表紙。縦13.2cm×横9.2cm。外題、表紙中央の竜紋斐紙題簽（縦8.7cm×横1.8cm）に「自若菜到柏木」と墨書〔本文同筆〕。内題なし。見返し、金銀切箔散らし。本文料紙、斐紙。墨付241丁（13括り、各10・9・10・10・10・10・10・10・9・10・10・5枚。最初の2丁、最後の1丁は表紙と見返しの間に綴じ込まれる）。遊紙、前なし、後2丁。每半葉10行。字高、約10.7cm。和歌は改行して2字下げで書きはじめ、末尾は地の文に繋げる。奥書なし。巻の変わり目は丁の裏を空白にし、次の丁の表から書き始める。

掲出したのは03『奥入』が「老いぬれば」の引歌を指摘していた場面。出家を志す朱雀院は春宮に向かって「女宮たちのあまた残りどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかり（ける）」と述べる。そして、女三宮を源氏と結婚させようと望む展開になる。

【翻刻】左ページ4～5行目

す女宮たちのあまたのこりとゝまるゆくさきを / 思ひやるなんさらぬわかれにもほたしなりぬへかりさ

II 河内方の注釈

04 『紫明抄』（巻2 残簡） 素寂著 綴葉装1括 〔鎌倉末期〕写

登録番号、0340254。若紫巻頭から1括り4紙（8丁）分、36項目の注が現存。表紙なし。縦25.5cm×横17.4cm。内題「紫明抄巻第二〈自若紫卷／至花散里〉 紫雲寺隱侶素寂撰」。本文料紙、楮紙。每半葉10行。字高、約21.3cm。蔵書印なし。各項目の冒頭に朱合点が付されるほか、朱の書入れあり。

『紫明抄』は素寂が鎌倉幕府8代将軍の久明親王に献上した注釈。永仁2年（1294）以前の成立。全10巻。素寂は『源氏物語』の河内本を整定した源親行の弟。父の光行以来、代々『源氏物語』の本文整定や注釈などに取り組んだ。『紫明抄』は京都大学文学部蔵本、内閣文庫蔵10冊本、同3冊本の3系統に大別できる。当該資料は京大本とほとんど同じである。どちらも鎌倉期の写本であり、『紫明抄』成立間もないころの本として貴重。

掲出したのは、源氏の従者が明石君の噂をしあう場面への注。1人の従者が「情けなき人なりゆかば」

明石入道も明石君を心のままに置いてはおけまいと言う。親行は「古本」に「情けなき人に」とあるにもかかわらず、素寂の本に「に」の字がないのはどうしてかと質問する。素寂は最初は単なる書き落としであったが、後に「に」のない方がよいと考えるに至ったという。というのも、「に」がない場合、「心ない人が（国司に）なって行ったら」の意となるが、「に」がある場合は「（明石君が成長するにつれて）心ない人になっていったら」の意となる。明石君は後に源氏の娘を産む女君なので、悪く描くのは不審だというのである。それに対し、親行は「よくよく考えるべきだ」と判断を保留した。

素寂はうっかり「に」を書き落としただけなので、「に」を削除すべきという主張は文献学的とはいえない。親行が安易に同調しなかったのも、そのためであろう。とはいえ、『源氏釈』や『奥入』が典拠の指摘中心であったのに対し、『紫明抄』は「に」1字の有無についても細かく吟味しているように、注釈の関心や態度が大きく変化してきている。

【翻刻】左ページ

なさけなき人なりゆかはさのみ心にまかせてをきたら / しをやといふもあり

親行問云古本にはなさけなき人にと見ゆるをそ / の本に仁字をおとされたるは見たてたる子細のあるにや

素寂答云はしめはあやまりておとし畢然を校合 / の時つら / 思とくに仁字をくはふれはむすめに / きこえ仁字なくては国司にきこゆ仍明石上ほと / のよき人にはいさゝかあやしき字一もましへかゝん / 事たまのきすにおほえ侍しかはくはへいるゝに / をよはずそのまゝにて侍なりとこたへ侍にしはらく案〔以下、次ページ〕してくはふへしともいはすみつからか本をもけたす / よく / 見たてゝこそとてやみにきいはれなきには / あらぬにこそ

05 『原中最秘抄』（抄出本） 源親行著・行阿ら増訂 袋綴1冊 〔江戸前期〕写

登録番号、0357747。砥粉色無地表面紙。縦26.9cm×横19.5cm。外題、表紙左肩に「源^(ママ)中最秘抄」と打付書〔本文同筆〕。内題、「原中最秘抄」〔本文同筆〕。本文料紙、斐楮混漉。見返し、本文共紙。墨付42丁。遊紙、なし。毎半葉12行。字高、約20.8cm。奥書「原中最秘抄者光源氏物語先／覺行阿法師所撰述也補紫明／水原之罇漏包羅和漢典策之／旧事已謂勒矣今依 台命芟／夷其繁辭撮取其典要以使後／学之觀覽仍詠和歌二章以擬／跋語云／一もとをちゝにそめなすむらさきの／色を見なからわく人やなき／底ふかき君かこゝろのみなかみを／うつす水くき跡もたえせし／耕雲山人明魏」。蔵書印、1才右下に「羽佐間／薬坊図／書之記」（朱・陽・方・単。縦3.5cm×横3.3cm）、その上に「紫香藏」（朱・陽・方・単。縦4.3cm×横1.5cm）、その上に「渡邊千秋蔵書」（朱・陽・方・単。縦16.9cm×横1.5cm）。

源光行・親行は『源氏物語』本文の整定を進めるとともに、『水原抄』という注釈も作成した。これは『源氏物語』各巻に注を書き込む形式をとったらしいが、散佚した。『原中最秘抄』は『水原抄』の中の秘説のみをまとめたものと見られる。親行没後も義行（聖覚）、知行（行阿）の2代にわたって加筆された。伝本としては、南北朝期の歌人花山院長親（?～1429。法名明魏。号耕雲）が要点を抄出した系統が早くから流布していたが、長親の手が加わっていない広本も近代に入ってから発見された。当該資料は抄出本に属す。

掲出したのは若菜上巻の最初の注。『源氏物語』の中で若菜巻のみが上下に分かれていることについて、『漢書』・『後漢書』・『日本書紀』にも先例があることを指摘する。物語の例としては『うつほ物語』が挙げられるが、そこに「源順作」との注記が付される。現代では『うつほ物語』の作者は複数人いたと想定されており、源順（911～83）が単独で作ったという説はあまり支持されていないが、近代以前には源順説が広く信じられていた。この注記は『紫明抄』にも見え、それぞれ順説の初期のものとして注意される。

【翻刻】左ページ1～6行目

若菜 / 一 此物語五十四帖内以一名分上下例事 / 漢書帝紀第一卷高紀上下 後漢書百卷内呂后 / 紀上下 日本紀神代紀上下 うつほ物語〈源順作〉第五吹 / 上の上同下〈自余准 / 可知〉又立並卷例事空蟬夕顔 / 并也宇津保物語第五の並〈一まつりの使 / 二菊の宴〉

参考2 『源氏物語』（断簡） 1幅 〔鎌倉中期〕写 * 伝藤原為家筆 * 河内本

登録番号、1092121。薄雲巻の11行分。縦32.0cm×横25.7cm。字高、約27.8cm。本文料紙、斐紙。右端の余白に綴穴が4つある。極札などなし。ただし、本学図書館に所蔵されるツレの断簡は為家筆と

極められている。河内本の成立まもないころの写本として貴重。鎌倉時代の河内本は大型で、朱点が付されているのが特徴。

新春を迎えた二条院に人々が参賀する場面。現在では藤原定家の整定した青表紙本が広く読まれているが、河内本である当該資料は一部の本文が異なっている。たとえば、2行目の「御よろこびなどに次第に引き連れたまへり」は通行本文では「御よろこびなどしたまふ、引き連れたまへり」であり、4行目「おのおの」・5行目「なべての世のけしき」は通行本文にない一方、最終行の「わたり」が通行本文では「ふと這ひわたり」になっているといった具合である。

【翻刻】「・」は朱点。

に・まいりつとひたまふめる人のおとなしきほとのは・ / 七日の御よろこひなどにしたいにひきつれたまへり・ / わかやかなるはなにとなく心地よけにみえたまふ・ / つき／＼の人もおの／＼心のうちにはおもふ事や / あらん・うはへはほこりに・なへてのよのけしき / 見るにころほひなりかし・ひんかしのみんのだ / いの御かたのありさまはあらまほしくこのまし / きさまにさふらふ人／＼・わらへのすかたなとうちと / けす・心つかひしつゝすくしたまふ・ちかきしるし / にはこよなくてのとやかなるおほんいとまのひまなど / には・わたりなし給へと・よるたちとまりなどやうに・

Ⅲ 室町時代の注釈

06 『河海抄』 四辻善成著 袋綴19冊（巻1欠）〔江戸初期〕写

登録番号、1214002～20。藍色無地表紙。縦26.5cm×横20.7cm。外題、表紙左肩の薄朽葉色地茶色下絵題簽（縦15.3cm×横2.7cm。明代の蠟箋か）に、「河海抄二（帚木 うつ蟬／夕顔）」などと墨書。本文は6筆ほどの寄合書で、題簽は第5冊の本文と同筆か。内題、「河海抄巻第二」。本文料紙、楮紙。見返し、本文共紙。遊紙、前後各1丁。毎半葉13行。字高、約22.6cm。奥書なし。蔵書印、1才右下に「矢野蔵書」（朱・陽・楕円・単。縦2.2cm×横0.8cm）、最終丁左下に「月明荘」（朱・陽・方・単。縦1.5cm×横1.5cm）。なお、第6冊はほぼ同時期に補写されたもの。第18冊に朱の書き入れあり。

『河海抄』は四辻善成（1326～1402）が室町幕府2代将軍の足利義詮（1330～67）の命で撰進した全20巻の古注釈書。貞治年間（1362～68）頃成立。平安後期から南北朝期に至るまでの古注を集成、増補したもの。河内方の古注釈と同様に多くの典籍を参照しながら実証的に考証している。

掲出したのは若菜上巻における光源氏の算賀の場面に対する注。源氏が算賀の申し出を頻りに辞退するので、養女玉鬘は若菜を贈るという名目で算賀を主催した。『河海抄』は若菜に「十二種」と「七種」があると説き、その名を掲げる（なお、後者は現代でも「春の七草」としてなじまれている）。次いで、若菜と算賀を取り合わせた先例として、「仁和の帝、人に若菜たまひける御歌」があるという。これは『百人一首』でも有名な「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」（古今集・春上・21）のこと。ただし、この歌が算賀と関わるという根拠は未詳（参考6参照）。

【翻刻】左ページ2～10行目

十二種若菜 / 若菜 ^{アサミ} 薺 ^{チサ} 苳 ^{ナツナ} 芹 ^{アズヒ} 蕨 薺 葵 蓬 水蓼 水雲 / 芝 菘 此中菘はさま／＼の
説あり白河院に松を献したる / 人ありけるをは僻事なりと仰あり大外記師遠は / 小大根のよし申ける
其説を用られけるよし旧記にみゆ / 七種 薺 繁蕪 芹 菁 御形 須々代 佛座
四十よりはしめて数の満を賀する也春の初若菜を摘て / これを便にて祝也古今にも仁和の御門人に若
菜給ける御哥 / あり是も賀給ける哥也

07 『河海抄』 四辻善成著、宗祇抄出 袋綴1冊（上冊欠）〔室町後期〕写

『花鳥餘情』 一条兼良著、宗祇抄出 袋綴2冊〔室町後期〕写

登録番号、0162499、0162968～9。栗皮表紙。縦23.5cm×横17.2cm。外題、『河海抄』と『花鳥餘情』下の表紙に「河海抄／共二冊」、『花鳥餘情』上の表紙に「花鳥餘情／共二冊」と墨書〔本文別筆〕。表紙の取り違えがおきている。内題、『河海抄』は「第十七 玉鬘」、『花鳥餘情』は「花鳥餘情第一抄出」。本文料紙、楮紙。見返し、本文共紙。遊紙なし。毎半葉12行。字高、約21.2cm。奥書、「此四帖者予五十有餘之比河海／花鳥之中令抄出者也今八旬之末／門弟有宗碩云道之志異他兩部／之抄出所讓置也／

明応九年六月九日／宗祇在^{〔判〕}□」。蔵書印、各冊冒頭右下に「延壽王院蔵書」（朱・陽・方・無杵。縦4.8cm×横1.2cm）。筑紫安楽寺留守職を代々勤めた大鳥居家、また野村八良旧蔵。『河海抄』と『花鳥餘情』には複数種類の抄出があるが、当該資料は宗祇の本奥書をもつ点で貴重。宗祇による抄出本は伝本希少。

『河海抄』で掲出したのは光源氏が帝からの賀を受ける場面。「蔵人所」から「置物の御厨子、弾き物、吹き物など」が贈られたという本文へ、「清涼殿」での「置物」の「置き様」として具体的な注を付ける。

『花鳥餘情』で掲出したのは玉鬘と秋好中宮からの賀に対する注。四十の賀にちなんで、玉鬘は「御地敷」を40枚用意し、秋好中宮は奈良の七大寺に4000反の布、都の40の寺に400疋の絹を奉納した。

『花鳥餘情』は「地敷」について唐筵に大紋の高麗縁をつけたものと説明する。また、延長2年（924）の醍醐天皇の四十の賀のときに4000反の布が十三大寺に奉納された例を挙げる。

【翻刻】『河海抄』右ページ1～5行目

をき物の御つしひき物ふ（き）ものなど / 清涼殿置物御厨子置様（孝道記） / 第一階（無置物） 第二階（右笛箱 拍子 / 左琵琶玄上 箏） / 第三階箏 第四階和琴 / 次大鼓 次鉦鼓 打物をは南に置へし先羯鼓（太笛 / 横笛 / 拍笛 / 拍笛）

【翻刻】『花鳥餘情』左ページ3～4・11～12行

御ちしき四十まい / 地鋪は唐筵に大文高麗へりつけたる / もの也或は髪地鋪あり（中略）
ならの京の七大寺にみす行布四千段此ちかき都の / 四十寺にきぬ四百疋わかちてせさせ給ふ
（〔以下、次ページ〕延長二年天子四十算布四千段十三大寺に諷誦を修らる）

【参考文献】

高田信敬「河海花鳥抄出一宗碩古典学の始発」（『源氏物語考証稿』武蔵野書院、2010年。初出1984年）、松本大「宗祇『花鳥余情抄出』の位置付け」（むらさき55、2018年12月）。

参考3 『源氏五十四帖』若菜上 尾形月耕画 1枚（全55枚のうち） 明治26年（1893）刊

登録番号、1370531。厚手楮紙の錦絵。縦36.4cm×横25.1cm。匡郭、縦32.1cm×横21.7cm。右肩に「源氏五十四帖 卅四」、その左の布目型押色紙形に「若菜上／こまつはら／すゑのよはひ／に／ひかれてや／野へのわかなも／としをつむへき」（背景に源氏香模様を刷る）。刊記、左下余白に「明治廿六年 月 日印刷出版下谷区スキヤ町十二バンチ印刷兼発行者 横山良八」。

玉鬘が息子2人を連れて源氏に若菜を献じ、和歌を贈答する場面。もともと鬘黒大将との結婚に乗気でなかった玉鬘は、立て続けに2人も子を産んだことを恥じ、子供たちを源氏に見せたくないと言っていたが、鬘黒大将はこの機会にぜひと連れてきた。その子供たちは「幼き君もいとうつくしくてものしたまふ」、「二人同じやうに、振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす」などと描かれる。玉鬘は「若葉さす野辺の小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな」と詠み、源氏は「沈の折敷四つして、御若菜さまばかりまゐれり。御かはらけ取りたまひて」上記の歌を詠む。絵では折敷が2つしか描かれていないが、その上には「御若菜」と「御かはらけ」が載っている。

08 『源氏物語提要』 今川範政著 袋綴6冊 〔江戸後期〕写

登録番号、1319993～98。水色布目地表紙。縦27.2cm×横18.9cm。外題、表紙左肩の型押霞引・銀泥竹文様題簽（縦18.4cm×横2.8cm）に「源氏物語提要一（～四）」と墨書〔本文同筆〕。本文料紙、楮紙。見返し、本文共紙。遊紙なし。毎半葉8行。歌は改行せず一字あけで書きはじめ、歌頭に朱合点あり。字高、約21.7cm。墨や朱の本文同筆の書き入れあり。蔵書印、各冊一才右上に「丹羽／蔵弄」（朱・陽・方・単。縦3.9cm×横3.9cm）。

『源氏物語提要』は武将であり歌人でもあった今川範政（1364～1433）による『源氏物語』の梗概書である。跋文によると、養女のために記したもの。ただし、伝本によっては跋文が異なり、「友」のためとする本もある。当該資料の跋文は前者。梗概書ではあるが、作中歌の解釈を特に重視している点で注釈の側面ももつ。

掲出したのは四十の賀における玉鬘と源氏の贈答歌に対する注。玉鬘は幼い息子たち（小松）をつれて養父源氏（もとの岩根）の長寿を祈ると詠み、源氏は行く末の遠い人の年齢に引かれて、自分もはるかに年を積めるだろうと応える。なお、玉鬘歌の「若葉さす」は通行の『源氏物語』では「若葉さす」、源氏歌の「すゑのいはひ」は「末のよはひ」となっている。

【翻刻】右ページ6～左ページ4行目

賀を申給ひ 若菜さす野辺に小松を引つれてもとの / 岩根をいのるけふかな本歌に 春日野に若菜摘つゝ万代を / いのる心は神ぞ知るらんもとの根さしとは源氏を親分にして / よめり御返し源氏 小松原すゑのいはみにひかれてや / 野辺の若菜も年をつむへき心はすゑ遠き人のよはひに / ひかれてわか身も年をはるかにつみつへしと也摘とは積とをかね / たり (下略)

09 『岷江入楚』 中院通勝著 袋綴 20 冊 (江戸後期) 写

登録番号、1084422～41。縹色地銀泥霞引金箔散らし裂表紙。縦 17.0cm×横 11.8cm。外題なし(表紙中央に金紙題簽(縦 12.0cm×横 2.2cm)が押されるが、空白のまま)。内題なし。見返し、金切箔散らしの間合紙。本文料紙、薄様。毎半葉 16 行。字高、約 12.7cm。遊紙、各冊とも前後各 1 丁。奥書なし。蔵書印、各冊とも前遊紙表右上に「伊達／邦宗／蔵書」(朱・陽・方・単。縦 3.7cm×横 3.6cm)、同右下に「伊達菊／重郎／書之章」(朱・陽・方・単。縦 5.8cm×横 5.9cm)、一才右下に「伊達」(朱・陽・方・単。縦 1.0cm×横 0.8cm)。

『岷江入楚』は中世の『源氏物語』注釈の集大成で、「河」(河海抄)、「花」(花鳥餘情)、「弄」(弄花抄)、「秘」(三条西公条(1487～1563)説)、「箋」(三条西実枝(1511～79)説と中院通勝(1556～1610)自身の聞書)、「或抄」と出典を示しながら、諸説を集成したもの。通勝の母は公条女であったため、『弄花抄』(一条兼良・宗祇の講釈を牡丹花肖柏が聞書したものを三条西実隆が補訂)をはじめ、三条西家からの影響が強い。

掲出したのは 08 と同じく玉鬘と源氏の贈答歌への注。源氏歌に対しては『河海抄』の指摘する引歌を記した後、「秘」すなわち公条説として「末遠き人の齢にひかれてや、我が身も年をはるかにつむべし」と記す。これは 08『源氏物語提要』の説とほぼ同じであり、公条よりも古い説であることが分かる。

【翻刻】右ページ3～6行目

小松はら末のよはひにひかれてや野へのわかなも千世をつむへき
〈河〉春日のゝわかなゝらねと君か為年の数をもつまんとそ思ふ
〈秘〉末遠き人の齢にひかれてや我身も年をはるかにつむへし

IV 江戸時代の注釈

10 『湖月抄』 北村季吟著 袋綴 11 冊 (60 巻合冊) (延宝元年(1673)刊) * 献上本(薄様刷特装)

登録番号 1076716～26。紺色無地絹表紙。縦 30.4cm×横 21.7cm。外題、表紙中央の金銀揉箔散らし絹地題簽(縦 20.6cm×横 4.9cm)に「湖月抄 表白 年立 [上下] / 雲かくれ 系図」の如く墨書する。本文料紙、薄様斐紙。見返しは題簽同様の装飾のある斐紙。本文は 4 周単辺(縦 23.4cm×横 17.5cm)。夢の浮橋末尾に北村季吟の跋文と刊記がある。注釈 54 巻、発端・系図・表白・雲隠説各 1 巻、年立 2 巻の 60 巻を 11 冊に合冊する。

注には頭注と傍注があり、前者は「諸抄の古事・来歴・註解の詞繁き物」を記し、後者は「人々の言語・対応・心中の趣・草子地・文章の註解詞すくなき」ものを記す。こうした頭注+傍注の注釈形態は、先行する『首書源氏物語』にも用いられている(重松信弘『新攷源氏物語研究史』)

以下、本学名誉教授・高田信敬による解説(2018)より引用する。

表紙・題簽・紫の角裂等にも配慮した特製本である。表紙に若干の虫損を見、本文のそれと一致しないので、改装。仕立て直しにあたり、各巻ごとに薄紫色斐紙 1 折を綴じ入れ、隔てとする。原態は 60 冊の分巻か。使用料紙も特殊な薄様(薄漉きの斐紙)であり、通常の楮紙を用いた書物に比べ、厚さは 5 分の 1 程度で済む。江戸時代には顧客の注文に従って様々な特製本が少数制作されており、掲出本も豪商か貴顕かの要請に応えたのであろう。

『源氏物語』の古い注と言えれば誰もが『源氏物語湖月抄』を思い浮かべるほど、広く流布し、現在もなお有益な書。しかしいくつかの変った典籍が紹介されており、珍しいものを挙げると、一つは薄様刷り、もう一つは「八尾甚四郎」を筆頭書肆とする初印本である。掲出本は埋め木修正を持つ後印本ながら、特製本であるところが評価されよう。各冊巻頭に「雲邨文庫」の朱文印を押す。善本稀書の収集によって聞こえた和田維四郎(1856～1920)の旧蔵。蔵書印の位置から見て、改装

後に和田の所有となったのであろう。

和田維四郎は、号雲村。安政3年生まれ、大正9年没、享年64。若狭小浜の人。名著『訪書余録』によってその名は有名であるが、実は鉱物、地質学者としての見識、標識採取は世界的なレベルを保つなど多彩な業績を残した。古書古文書蒐集と研究調査は晩年に属し、今大東急記念文庫と東洋文庫に分蔵される（『近代蔵書印譜』）。

【参考文献】

重松信弘『新攷源氏物語研究史』（源氏物語研究叢書II、風間書院、1961年）、国文学研究資料館「蔵書印データベース（人物情報）」「和田維四郎」。

11 『源註拾遺』 契沖著 袋綴8冊〔江戸後期〕写

登録番号、1252177～84。縹色表紙。縦24.0cm×横16.5cm。外題、左肩の金銀霞引き題簽（縦19.6cm×横3.0cm）に「源註拾遺 一（～八）」のごとく墨書。一丁オ右肩に内題「源註拾遺卷第一」あり。その下に「朱校橋本稲彦」とあって内題を朱で「源註拾遺大意」に直す。楮紙。見返し本文共紙。遊紙なし。半葉11行。綴じ直し、上部に裁ちあり。

『源註拾遺』は、契沖による源氏物語注釈書。「一」から始まる箇条書きで源氏物語の本文、湖月抄および湖月抄所引の旧注の説を掲げて、それに対する自説を「○今案」形式で述べる。

第八巻の奥に「右源語拾遺七巻一覽湖月抄之次率爾註愚案以備他日校考者也〔後加大意一卷共八巻全〕／元禄九年七月十九日／密乗沙門契沖／同十一年正月五日一校畢」とあって、もと書名が「源語拾遺」であったことや第二巻以降の注釈を終えて奥書を記し、後に総論にあたる大意一卷を加えて全8巻としたという成立の経緯が知られる。契沖による本奥書の左には朱で校合奥書「大意共八冊 以上校合 安芸国橋本稲彦」とあり、朱による内題の改変（「巻第一」から「大意」への修正）は、契沖の本奥書の内容を踏まえての稲彦の校訂であるとわかる。橋本稲彦は本居宣長の門弟。細流抄など他の注釈や語注のほか、誤字や仮名遣いの修正、湖月抄版本の丁数などを朱で加える。

掲出は源氏物語「蜻蛉」の巻末。「腸断の字の仮名はたゆるなり。たふとよむるなし」の後、改行して朱の割注形式で「宣長云一本ハラワタタユルハトアリ 又一本ハラワタヲタユルハトアリ ハラワタタユルトアルヲ用ユベシ タフルトアルホンハ決メ誤リナリ」と稲彦の師である宣長説の引用が見える。

【参考文献】

池田利夫「契沖の本巻所収注釈書の伝本」（『契沖全集 第九巻 勢語臆断・源註拾遺他』1974年、岩波書店）。

12 『源氏物語玉の小櫛』 本居宣長著 袋綴9冊〔寛政11年（1799）〕刊

登録番号0228115～23。浅葱色表紙。縦26.7cm×横18.5cm。外題、表紙左肩刷題簽（単辺）に「玉の小櫛 一（～九）」（縦19.2cm×横3.7cm）。巻一の題簽にのみ野内右肩に「源氏物語」、書名と巻名の間に「本居宣長」と墨書がある。内題に「源氏物語玉の小櫛一の巻」、柱題に「玉のをくし一（～九）」本文料紙、楮紙。見返し本文共紙、遊紙なし。匡郭内縦19.6cm×横14.4cm。裏表紙見返し単郭内中央に刊記「須受能耶蔵板」。藤井高尚による序があり序末に「神の宮人／藤井高尚」とある。蔵書印は「静修齋」（一丁オ右下）・「島田」（一丁オ右下）、裏表紙見返し左下に「富岡氏蔵」。巻一と巻二は総論、巻三は年立、巻四は本文校勘、巻五～巻九は語注の構成である。

『玉の小櫛』は、本居宣長の記した源氏物語の注釈書。宝暦7年（1757）10月に5年半に及ぶ京都遊学を終えて28歳で松阪に帰り、翌年から門人に源氏物語の講釈をはじめ、寛政7年（1795）4月までに全4回半行った全講の集大成である。

旧注を批判的に取捨して自説を詳細に述べており、『湖月抄』についても「此抄すべて句読いとみだりにして、誤りおほく、中には句ヨミキリによりて、いたく語の意をも誤ること多し。……清濁も、わろきことおほし。仮名づかひのことごとくたがへるは、後の世のおしなべたることなれば、わきていふべきにあらず」など批評しているが、真淵の新釈と同じく本文・注釈共、『湖月抄』を基とする。明和2年（1765）に自らも書写した契沖『源註拾遺』の影響が色濃く、契沖については「これは又格別の力量の人なれば、めづらしき事多し。すべて此人の著述の書は、いづれも近世の浮説をば一向とらず、古書を引て証せらる。是によりて發明事多し。誠に歌学にをきてはかたをならぶるものなし」と絶賛している。

「玉の小櫛」の名は、巻首の「そのかみのころをたづねてみだれたるすぢときわくる玉のをぐしぞ」

の宣長詠による。当初、『源氏物語玉の小琴』とあった書名を「小琴」の名は万葉集の注釈書『萬葉集玉の小琴』に譲り、「小櫛」に改めた。寛政8年(1796)に稿を起し、同11年に鈴屋から刊行された。藤井高尚の序文には、石見国浜田藩主松平康定の依頼によって成ったとある。

【参考文献】

『日本古典文学大辞典 第二巻』「源氏物語玉の小櫛」(大朝雄二執筆)、『本居宣長全集 第四巻』「解題」大野晋執筆(1969年、筑摩書房)。

13 『紫文消息』 橋本稻彦著 袋綴1冊 [文化4年(1807)]刊

登録番号0294426。白茶色表紙。縦17.5cm×横12.0cm。外題、表紙左肩刷題簽(縦11.5cm×横2.2cm)に「紫文消息 全」。内題「小萩が本」。表紙見返しは本文共紙。遊紙なし。料紙、薄様。文化4年10月の自序あり。序は匡郭なしで毎半葉8行、本文は4周単辺(縦15.0cm×横9.4cm)に毎半葉9行で記す。和歌は一字下げて書き、末尾は地の文へ続く。刊記は52丁ウ末に「小萩が本 畢 大坂書林 宣英堂板」、「文化四年戊辰六月／書林／京都 額田正三郎(中略)大坂 葛城長兵衛」。蔵書印なし。

紫文消息は本居宣長の門弟であった橋本稻彦が、源氏物語の消息文を抜き出して頭注、傍注を加えた書。橋本稻彦は、天明元年(1781)生、文化6年(1809)没、広島の人。寛政10年(1798)に松坂を訪れて宣長に入門した。

紫文消息には先行の注釈も引かれるが、典拠を明記するのは師説(本居宣長説)のみ。たとえば、掲出箇所(36丁オ)「うちつけなるやうにやとあいなくとどめ侍りて」の頭注に「「あいなく」は師説に「何といふわきまへもなしにうちつけにものする事なり」といへり」とあり、本居宣長『玉の小櫛』に「あいなく 三のひら／何といふわきまへもなしにうちつけに物すること也」とそのままの記述が見える。『玉の小櫛』を傍らに「師説」を記していったあり様がうかがえる。頭書に○とあるのは、稲彦筆の凡例によると、消息文の大意である。

参考4 「契沖の書簡に就いて」久松潜一自筆原稿、昭和5年(1930)

登録番号1330563。松屋製200字詰原稿用紙10枚に書かれた久松潜一『上代民族文学とその学史』(1934年、大明堂書店)「第三編 上代民族文学研究史、第三章 契沖考、一 契沖の書簡に就いて」の自筆原稿。昭和5年(1930)、久松36才の時の筆。

「断片的な書簡の中にも伝記や学説の一端を知り得る点が多い」として、契沖が善右衛門(海北若沖)に送った日付のない書簡から、年代や水戸家に対する契沖の心情を推察する。例えば、歌の2行後に見える「はやめ葉」(出産を促す葉のこと)云々の記述について、

「はやめ葉」云々とあるのは或は水戸家の積万葉集編纂に対する速成的な方法に対する多少の不満の情を表したものであらうか……義公に対しては心から敬服して居たことは明らかであるが、周囲のもの、ことに契沖の学説にそのまま従ふことに反対するものもあつたのであるから、多少の不満もあつたのであらう。本来情熱をうちにたたへた契沖としては自然の事でもあつたらうが、この書簡はそういふ点からも珍しい資料と思はれる。

として契沖の内面までを洞察する。短文の中に、註釈から作品の本質を捉えようとする久松の実証主義的研究態度がうかがえる。該当する契沖の書簡そのものは個人蔵であり、本学にはない。

【参考文献】

久松潜一『上代民族文学とその学史』(1934年、大明堂書店)、『契沖全集 第十六巻 書入二 遺文 書簡集』(1976年、岩波書店)。

参考5 『萬葉代匠記』(巻2断簡) 折本(改装) [元禄元年(1688)頃]写 *契沖自筆

登録番号、1401558。折本1帖。白牡丹唐草織文表紙。縦27.7cm×横20.0cm。外題、表紙中央の白地金砂子散題簽(縦17.2cm×横3.2cm)に澤瀉久孝筆で「契沖阿闍梨真筆／萬葉代匠記巻二断簡」と墨書。自筆清書本、袋綴楮紙の一丁分(縦27.3cm×横39cm)を折本に仕立てたもの。歌を1字分高く1行で書き、釈文は改行して1字分下げて記し、朱で句読、返点、送り仮名等を付す。

『萬葉代匠記』は、江戸時代の国学者契沖の記した万葉集の注釈書。徳川光圀は下河辺長流へ万葉集

の注釈書作成を依頼したが、長流の発病により、親交のあった契沖に改めて依頼。契沖は長流に代わって注釈書の作成を引き継いだ。代匠記の書名はその経緯に由来するという（久松潜一「契沖と萬葉代匠記の序」『日本思想大系月報』25、1972年7月。なお「匠」は水戸光圀を指すとの説もある〈林勉「萬葉代匠記の書名」『契沖全集 1』〉）。従来、契沖の起筆は、長流発病により水戸家より代理の依頼を受けて以後のことと考えられていたが、池田利夫により、水戸家から長流への依頼に先立つことが明らかにされた（「万葉代匠記の起筆年次」『文学』47巻7号、1979年7月）。『代匠記』には、元暦年間に成立した初稿本（安藤為章の『年山紀聞』の記事に従えば元禄元年〈1688〉成立）と、元禄3年（1690）に完成した精撰本があるが、初稿本の本文は版本に拠り本文校訂がなされていない。不満に思った光圀が諸家にあった諸本を校合した四点本万葉集を契沖に貸し出し、本文校訂の上で釈文を全面的に改稿して成ったのが精撰本である。精撰本では、初稿本に度々現れた長流説の引用がほとんど見えなくなる。

本学所蔵の断簡には、自筆清書本系初稿本の万葉集巻二 126 番歌・石川女郎の贈歌についての釈文の一部と 127 番歌・大伴田主の報贈歌の本文および釈文の一部が記されている。

林勉「萬葉代匠記の諸本 概説」（『契沖全集 第一巻 萬葉代匠記一』）によると、契沖自筆の自筆清書本系初稿本のほとんどが彰考館に所蔵されていたが、戦災のために焼失し、お茶の水図書館（現・石川武美記念図書館）に巻十六の1冊（全59丁）が蔵される他は、巻二の26丁分と巻三の3丁分が断簡として複数の箇所に分蔵されるのみであるという。巻二の断簡の一部（193～4番歌の1丁分・111番歌～115番歌題詞の2丁分と182番歌の2丁分・当該断簡・212～220番歌までの4丁分）は、もともと大島雅太郎蔵であったものを澤瀉久孝、岡田真、飯田正一、吉永登の四氏に分けたものである。昭和26年6月4日の日付で吉永登が経緯を記した便箋が各々の箱底にあるというが、本学蔵書には逸して見えない。飯田正一氏旧蔵の断簡であり、『契沖全集第一巻 萬葉代匠記』にこれを底本として「以下一丁分、自筆断簡」とされている。岡田真氏が所蔵した断簡は現在、天理図書館に所蔵されている。

【参考文献】

林勉「萬葉代匠記の諸本 概説」（『契沖全集 第一巻 萬葉代匠記一』1973年、岩波書店）。

参考6 『古今和歌集』紀貫之等撰 列帖装2帖〔天和・貞享（1681-88）頃〕写 *契沖筆

登録番号、0317413～14。表紙は紺地に黄と白との唐草花菱文緞子裂。縦24.9×横18.1cm。外題、内題なし。見返し、金切箔・砂子蒔き。本文料紙、斐紙。毎半葉10行、短歌は1行にして時に2、3文字折返し、長歌は句ごとに1字分の余白を置き、1行4句を記す。旋頭歌は末尾10字程度を折返す。上冊は仮名序、古今和歌集巻第一～巻第十までを記し、本文墨付76丁、後付白紙2丁。下冊は第十一～二十までと真名序を記し、本文墨付79丁、後付白紙1丁。その表に「此古今集全部二冊契沖阿闍梨／墨痕也聊不涉議論者矣／文化元年三月 賀茂季鷹」の鑑定奥書がある。極札に「円珠庵契沖阿闍梨 やまと歌は頭」「古今集上下二冊市販本 辛丑閏正 了因」とあり、清水了因、天保十二年（1842）閏正月の鑑定であることを示す。桐箱の蓋表には「契沖法師筆／古今和歌集 全部二冊」、身の裏には「香栖居蔵」の墨書、並べて「中根蔵書」のペン書がある。「香栖居」は不明、「中根」は本書を鶴見大学図書館に寄贈された中根専正氏（現・鶴見大学附属中学・高等学校 第6代校長）。

本文系統は流布本系統の定家本の貞応本で、仮名遣いは定家仮名遣に従う。本学名誉教授である池田利夫は本書の書写年代を、契沖仮名遣の確立過程から、河島本古今余材抄の起筆以前（元禄4年下限）と見て天和・貞享頃と推定する。文化9年に刊行された本書の模刻本『契沖筆跡模刻本古今和歌集』において定家仮名遣は契沖仮名遣に改められている。加えて下冊73丁ウの墨滅歌の後の余白の下に「契沖」の署名が補われており、契沖仮名遣への改変が契沖真蹟本であることを示すための作為であったことが知られる。模刻本の跋文（百合園蓮阿）には掲出の契沖筆『古今和歌集』にかつて上田秋成の極めが付されてあったと記されている。

掲出の部分は古今和歌集巻第一「春歌上」の光孝天皇の歌。河海抄（06参照）では算賀と関連付けられていたが、古今和歌集では春の歌であり、詞書にも「仁和のみかど、みこにおまし／＼ける時に人に／わかなたまひける御哥」としか記されていない。

【参考文献】

森繁夫「蓮阿のことども」（『人物百談』1943年、三宅書店）、池田利夫『契沖筆 古今和歌集』解説（1986年、鶴見大学）、川上新一郎「古今和歌集版本考—前稿の補訂をかねて」（『斯道文庫論集』第34輯、2000年2月）、加藤弓枝「六位の書津吉田四郎右衛門」（『近世文芸』102巻、2015年7月）。

凡例

1. 書目一覧は、原則として書名、著者名、装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「*」以降にまとめた。
2. 編著者が未詳の場合は、著者名欄を省略した。また、『源氏物語』の著者名も省略した。
3. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
4. 推定記載は〔 〕、小字双行注は〈 〉に括り、2字以上の踊字は「／＼」、改行は「／」または「/」とした。
5. 『源氏物語』の巻名は通行の表記に統一した。例)「もみぢの賀」→「紅葉賀」
6. 漢字は通行の字体に統一した。
7. 古典本文の引用は断らない限り『新編日本古典文学全集』により、表記は改めた。
8. 解題執筆の際には、本学で開催された過去の展示解題のほか、以下の展示図録を参照した。
 - ・『藝林拾葉 鶴見大学図書館新築記念貴重書図録』(1986年)
 - ・『大学院文学研究科開設記念 鶴見大学図書館蔵貴重書展目録』(1989年)
 - ・『古典籍と古筆切 鶴見大学蔵貴重書展解説図録』(1994年)
 - ・『学校法人総持学園創立 80周年記念和歌と物語 鶴見大学図書館蔵貴重書 80選』(2004年)

展示担当

表紙（ポスター）：伊倉史人（ドキュメンテーション学科）

01～09の解題：田口暢之（日本文学科）

10～参考6の解題：新沢典子（日本文学科）

第157回 鶴見大学図書館 源氏物語研究所 貴重書展
(文学部 日本文学科 共催)

源氏物語の古注釈

発行日：2023年2月20日

編集・発行：鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2丁目 1-3